

書 評

『奄美民謡総覧』

監修 指宿良彦

編集 セントラル楽器奄美民謡企画部

小川学夫、指宿正樹、指宿邦彦

(南方新社 2011年1月刊 708頁)

山 下 欣 一

本書『奄美民謡総覧』は、画期的な奄美の民謡資料集である。周知のように、奄美民謡については、日常生活に密着していて、奄美の人々がそれぞれに、歌者（ウタシヤ）であり、聴き手であり、そして批評家であるのはウタ遊びで、奄美の人々が歌を聞き、味わい、批評を加えるとともに、さらに、自分の見識を披露する機会を見聞した者にとっては、きわめて、人々の生活に密接に結びついた存在であることを実感させるものでありつづけている。

さらに、奄美のシマウタについては、その出自、そのシマウタの歌われているシマという存在が背景にあった。たとえば、奄美大島を例示してみても、現在の奄美市を中心にした北部地方と瀬戸内町を中心にした南部地方をそれぞれ「カサンウタ」と「ヒギヤウタ」という二大区分で考える人々もいるほどである。

奄美民謡といっても、奄美五島で歌われている歌であり、大小ある島々でも、それぞれ独自性を持って歌われてきて、鑑賞され、継承されてきたのであった。巨視的視点からみても、奄美五島は、地理的、言語的にも、日本本土文化圏とは、明確な一線を画しており、特に、言語は、日本本土方言と一線を画する琉球方言として区分されている。自然的環境からも亜熱帯性気候に属し、北上する黒潮に、島々の沿岸は洗われ、

温暖な地方となっている。

従って、日本本土とは、同一の条件のもとに議論するには、その理由についての説明が必要となる。そして、たとえば、奄美大島を例にとってみても、簡単に要約してみると、険阻な山々の間に、つつましく展開する集落（シマ）は、かなりの特長を有していた。年中行事にしても、言葉にしても独特な伝承を保持していた。このような“シマ”で歌われる歌が「シマウタ」であったことを認識する必要があると思う。

奄美の人々にとっての「シマウタ」は、心のより拠であり、源泉であった点は、知るべきであろう。従来、奄美では、多くの歌謡集成が刊行されている。それは、資料としては貴重であるといえるが、地域的には、普遍性を持たないという難点があったのも事実であろう。

今回、奄美のシマウタの研究に生涯をかけて生き抜いてきたといえる小川学夫氏を中心に、その小川氏を側面から援助しつつ、奄美民謡のレコード化という困難な事業を推進してきたセントラル楽器奄美民謡企画部、指宿良彦、指宿正樹、指宿邦彦氏などによって、その集大成とでもいべき奄美民謡のシマウタ全歌詞とそれらの共通語訳、全曲目解説を付して刊行された。これが本書『奄美民謡総覧』であり、内容は、セントラル楽器が制作、または関係したレコード、テープ、ビデオ、CDに収載した奄美の伝承民謡（古典民謡といった時期がある）、新民謡、新作民謡、器楽曲に関する記録、曲名、作詞、作曲等、歌唱者、演奏者、詞章、歌詞、共通語訳等にわたって記録したとしている。その他についても詞章、歌詞部分は反復を含めて、漢字混じりひらがなで記している。またハヤシコトバは、大部分をカタカナで記した。相方ハヤシは（ ）でくり、歌詞の一部をくり返すものは、歌詞同様、漢字混じりひらがなとし、歌詞と別の場合は、ハヤシコトバ同様に漢字混じりカタカナとした。奄美民謡の資料集としては、きわめて、ていねいな体系的な記載を試みているのは注目していいであろう。資料集としての視点と方法については、同一方法によって整理、記載するという『資料集』としての最低限度の規範を厳守しているのは画期的な試みであり、この点は注目していいであろう。

本資料集の主要な部分について、指導的編集を担当した小川学夫氏

は、その半生を奄美諸島の民謡研究に捧げた先達であることは、指摘するまでもない。小川氏の処女作としては『奄美民謡誌』（1979・法政大学出版局）がある。本書は、奄美民謡の採集と資料化を、奄美民謡の存在形式について、丹念に分析を試み、その歌の形式として、様式化を試みたのである。従来、奄美のシマウタについては、奄美の「シマ」に帰属する民謡であるという意識が優先したのであった。

それでは、「シマ」とはなにか？ 奄美の人々の認識によれば、地域的には、独立して、一つのまとまりをみせている集落のことである。もともと、奄美大島を例示すれば、北部から、南部にかけて龍郷町、奄美市、宇検村、瀬戸内町と行政区分されている。これらの市・町・村は、さらに各集落に分かれている。たとえば、奄美北部の龍郷町を例示すると以下のような集落がある。

○龍郷町 安木屋場、円、嘉渡、幾里、秋名、竜郷、久場、瀬留、浦、大勝、中勝、戸口

龍郷町は、奄美大島の北部に位置し、東シナ海と太平洋に面している。もともと奄美大島は、山岳が険峻で、海に向かって、開いている沖積台地に展開しているのが奄美大島の集落で、方言で「シマ」と呼ぶのである。「シマウタ」という呼称は、かなりそのシマ独特の「ウタ」というニュアンスが強い。

シマの人々にとっては、自己の属するシマで伝承されてきた「ウタ」には、それなりの自負心が強いのである。もともと、明治、大正、昭和、平成の時代の変遷にもかかわらず「自分のシマ」という意識は強い。奄美の人々にとっての「シマウタ」とは、自分のシマ（集落）で、うたわれるウタである点を強く意識している点を注目すべきである。そして、このような閉鎖的とでも指摘できる「シマ」の孤立性は、シマの人々にとっては、自己のアイデンティティを確認する絶好の場になることも指摘できるのである。

本書は、奄美の民謡の記録とその販売に尽力したセントラル楽器とそ

の中心にあった小川学夫氏の献身的な努力によって、ここに一冊として刊行されたのは喜ばしいことである。

本書は、長年にわたって、奄美の民謡の生々躍動するその動向とともに第一線で活躍し、関係してきた小川学夫氏、セントラル楽器店の指宿良彦社長など関係者によって、できるだけ資料に従っての記録を試みているのも本書の特色となっている。それらは「伝承民謡・新作民謡創作歌詞集、新民謡歌詞集、奄美関係愛唱歌集」の第三部にまとめられて、巻末に記録されている。第二章としては、「新民謡歌詞集」約85曲の歌詞などが記録しており、収録されてもいる。

この試みは、これらの歌曲が、日本本土の歌謡曲の影響を受けながら、新民謡としてのジャンルを確立しているのを明確にしている点に注目すべきであろうかと思う。編者らの努力によって、ここに、大冊としての『奄美民謡総覧』が刊行されたのは、奄美研究史における画期的事業であり、一大慶事であると考えるのは筆者一人ではないと思ひ深甚の敬意を表するものである。

しかしながら、もう一つの側面をも忘れてならないと考える。それは、なにかというと「奄美のシマウタの格付け」に関するコンクールである。今まで座敷で、うたわれ、“かけあい”、“はやし”などを聴き手が行ってきた長い間の慣わしが破れ、声も高く、かつマイクになじむ歌声が好まれるようになって、いわゆるステージ化が推称されるようになっていく傾向が定着している現状である。いわゆるシマウタのコンクールで選出された優勝者が全国コンクールに出場し、入選するばかりでなく、日本一の称号を得るといふ人々が輩出するようになった現状があり、奄美のシマの人（シマびと）が、会場で「自分たちのシマでは日本一ではないぞ」と大声で叫んだシマ人がいたのには驚いたことがある。しかし、このような感情は、平均的な奄美人でシマウタ愛好者の正直な表現であると考えることができる。しかしながら、現在では、奄美のシマウタのステージ化は、どのような意味があるかの解明も、また奄美歌謡研究の一大テーマであると考えられるものである。

『奄美民謡総覧』

今回刊行された『奄美民謡総覧』には、また、奄美シマ唄全歌詞、共通語訳、全曲目解説の副題がついている。現在のところ、制作レコード・テープ・CDの解説記事とともに、一大インデックスになっていて、資料としての分類、整理が一貫して、体系化されている点において画期的な業績といえよう。研究者としての小川学夫氏は、また未開拓の奄美のシマウタの分類、整理に、きわめて科学的な方法によって、『奄美民謡誌』をすでに1979年という時代に刊行し、ここに、またセントラル楽器の保存する資料類（歌詞カードなど）を分類して、その集大成を刊行したことは、一大偉業と指摘することができよう。しかして、また、前記したように、奄美民謡のステージ化についての見解もまた奄美シマウタの一大問題として提起されているのであれば、さらなる小川学夫氏の研究成果を期待したいものである。

参考文献

小川学夫「私の奄美民謡研究」『想林』創刊号、鹿児島純心女子短期大学江角学びの交流センター地域人間科学研究所編 2010 pp.68～81

(鹿児島国際大学名誉教授)